

第66回 山口西田読書会

出席者：佐野先生、他多数

1 前回の議論要約

①第2編 実在 第8章 5段落について

(2, 8, 5) → 「**美術家はかくの如き直覚の最も優れた人**」

- ・直覚＝**知的直観**であることを確認した。
- ・これに関連した内容として、以下の部分を読んだ。
(3, 13, 4) → 「**宗教道德美術の極意**」 → **真の自己を知ること**。
(3, 11, 5) → 雪舟の例。「**自己は客観世界の反影**」

②杉山さんの哲学的問いについて

A：「**真の自己は精神に至って始めて現れる**」と「**我々の主観的統一**」にある種の優位を与えられているということ。

B：**真の自己を備えている人間は自然に対してどう接していけば善いのか**。

【Aについて】

「**我々の主観的統一**」について

- ・人間の優位性＝精神（反省）の存在にあるのではないだろうか？
- ・佐野先生→本当にそうだろうか？人間は、精神があるがために、「ただ～する」ということを続けられない。対して、自然は「ただ～する」という世界に居続けることができる面もある。**人間は、純粹経験の世界に、ずっと居続けることができないために、人間が自然より優位と決めつけられない。**
- ・精神は統一する側であるために優位なのでは？
→自然は統一される側、精神は統一する側であるが、その根本は**唯一実在**（同一）であることを確認した。
- ・純粹経験から分別を加え、主観、客観が見えていくなかで、精神がはっきりと現れるために優位なのではないか？

【Bについて】

- ・主客同一である以上、自然とは、我々が感じる世界である。私はそこに溶け込んでいる。人は自然と共に「**あるがまま**」に生きる。流されることではない。考えなくてはいけない。人は利己的であるといった部分すらも受け入れて生きていくしかない。
- 自然の摂理に沿っているもの、沿っていないもの、あるいは、真実在になれているもの、なれていないものがあることを受け入れて生きていくということなのか？**

③「第2編 実在 第9章 精神」について

(2, 9, 1)

・自然は精神から離れた純客観的実在ではない。

「自然は一見我々の精神より独立せる純客観的実在であるかのように見ゆるが、その実は主観を離れた存在ではない」

・自然も我々の知覚する意識現象であり、直接経験。自然現象は全て主観的統一。

「自然現象をば直接経験の本に立ち返ってみると、すべて主観的統一によって成立する自己の意識現象となる。」

(2, 9, 2)

・我々が一般的に考えている精神とは何か？

→実在の統一的方面を捉え直したもの。そして、これは、他の経験などと比較することによって現れる。感覚は相対的なもの。

→子どものときの精神は主観が弱い。精神が発達するにつれて、物体と精神の区別が明らかになる。

「一つの感覚は独立に存在するものではない、必ず他と対立の上において成立するのである、すなわち、他と比較し区別せられて成立するのである」

・佐野先生→鐘の音が「ゴーン」と響くときの感覚

→これまでに経験したことから判断する。

→しかし、初発の経験はどうやって判断するのか？比較対象が無い。

→言葉が先か、経験が先か？

2 哲学的問い

「我々が同一の石を見るという時、各人が同一の観念を有っていると信じている。しかし、その実は各人の性質経験によって異なっているのである。故に、具体的実在はすべて主観的個人的であって、客観的実在というものはなくなる。客観的実在というのは各人に共通なる抽象的概念にすぎない。」

おそらく、客観的実在なるものは存在せず、意識現象の中で共通する抽象的概念だということなのであろうが、よく意味が分からない。存在はしないが概念としてあるのだろうか？

問い：各人に共通なる抽象的概念とは何か？

①客観的実在とは、判断の段階で現れる概念である。

石の例でいうと、我々の意識から独立して石が存在しているというわけではない。やはり、石というものは、各人の意識現象に過ぎない。つまり、共通の概念などではない。共通した概念が生まれるのは、各々が石を見たという意識現象を、「石である」と判断したときなのではないだろうか。

②抽象的概念とは、イメージのようなものである。

抽象的概念とは、判断以前にもっているぼんやりとしたイメージのようなものなのだろうか？石の例ならば、石というぼんやりとした概念。頭の中に浮かんでくるもの。

③コミュニケーションは可能なのか？

石の例では、石は、各人のもつ意識現象であり、客観的実在ではない。つまり、この意識現象は人によって異なっていることになる。だとすれば、この石について語ることはなぜ可能なのか？抽象的概念の中で語っているだけなのだろうか？しかし、その場合、我々はコミュニケーションの中で、真実を語っているのだろうか？